

思出を語りし夜

著者	後藤，理郎
雑誌名	龍南
巻	2 0 8
ページ	4 7 - 5 1
発行年	1928-12-10
URL	http://hdl.handle.net/2298/9167

思出を語りし夜

後 藤 理 郎

太陽が沈んで行く夕暮が來た。

私は縁がわでながめている

力強い自然の行進曲につれて

二本の高い樅の木の間

今太陽が沈んで行く。

小さなほこりがチラチラ五色に輝いてる、

白い壁も、水の面も、腐れかかつた板塀も

最後の一滴の光まで

名残をしさにチュー、チューと吸ひ込んでる、

眞赤な太陽がぶつつりと落ち込んだとき

影と光は無限の空間に飛び去つて

自然の呼吸が停止する瞬間が生れる

やがて闇の帳がいつもの様に沈んで來る

夕闇と言ひたくなる

お前達は眞青な息をはき出すのだ

樹々の木梢から、瓦の間まで

眞青だ！

口ごもりながら冷い息だ！

ぬらぬらした息であたりが満たされると、

樅の木が四五尺も背のびをする

一切の緊張がほどきとられる
そして、ぶつ、ぶつ、ぶつと日が暮れる。

一日の舞臺に暗黒の幕が下された
闇に成つたのだ、

降る、降る！まるで黒い粒の様に
暗黒がふりをそぐ

かすかな光が直線の上を飛びだした。

蛛蜘蛛らしい顔をした生物が
幕の間からそつとのぞく

闇の臭をかきながらにたりと笑つた。

一寸横眼で私に挨拶をする。

お恥かしい事です、

こいつは私の友達なのです

私が熱にうかされてる晩などは
ちよい、ちよい話しに來たものです。

何時の頃だつたか知ら、

丁度今夜の様に静かな闇だつた、

小さな蟲の音が障子越しに聞こえて居た。

よくまああんな無關心な聲が出るものだ

私は獨りで考へて居た。

私がそうやつて聞いてる内に

或る一つの聲に驚いた

それがお前の聲だつたのだ

その夜からお前は俺の友達だつた。

その夜から——

無關心さうなお前の聲にききなれた。

そしてその言葉を幾度となくまじめに聞いたのだ
何かの意義を認めた氣で

その夜からと言ふものは

俺は時々びくついたよ

ふすまに浮び出た自分の影法師さあ
その中にお前を探したりなどしてな

それにしても今夜のお前は

何んでみすぼらしい姿をしてるんだ

何んておべつかを使ふんだい

お前の帽子は黒くても

今夜はほこりで一杯だ。

俺は近頃そんな氣がするよ

ぼつぼつ御縁が切れかかつてるじやないかと言ふ様な
だがそう成つて見ると
少しやお名残をしくもある

無理もない事

俺はお前がすぎだつたからな

お前の言葉を尊敬しても居たからな

その言葉も今になつて見れや

ただの生活の方便にすぎなかつたのだ

まあ何でも好いさ

あの晩の事でも話さうか

お前は俺を泣せたのだつたかなあ

あの話のすぐ後で

俺は拳でどんと胸を一つ打つたのだ、

何を打つたのかつて

お前は知つてゐるにちがいない

泣いて居たんだらうかしら

だがその次の瞬間には俺は笑つて居た様だ。

そして無やみと祈つたのだ

何んの爲だつたらうかしら

お前は知つてゐるに違ひない

お前は闇の王様だから

その事があつてから

もうお前は他人だつたのかも知れないぞ

何を笑つてゐるんだい

悲觀してあがるくせに

俺にはちゃんとわかつてゐる

リアリズム風にでも吹き廻されたんだらう

お前は自分の暗さを誇つたらどうなんだ

宇宙の本質は明るさに有るんだらうか

いや宇宙は無限の闇にちがいない

そしてお前はその王様だ

だが俺もみすばらしい人間だ

お前と話すのももうあきた

太陽の出て來ぬうちに

歸つて行つたがよいだらうよ

獵 師

山から一人の獵師が來た

左は山手で右は谷

強い風が吹くたびに

小路についた足跡が

見る見る内に消へて行く

雲だ！風だ？

雲の山だ。

竹藪を通るときには

俺は見たぞ

青い若い竹だつたが

重たい雪にをし曲げられて

何本も

何本も

頭をそろえて我慢してた

頭の重たい雪を皆んなで一緒にもたげて居たんだ

春を待つとは言つてなかつたよ。